

社会人基礎力の育成と自己目標管理

—山口大学におけるCHECK-MANIFESTO-ACTION ループの試み—

平 尾 元 彦
藤 井 文 武
宮 崎 結 花

要旨

社会人基礎力育成のためのスキームとしてCHECK-MANIFESTO-ACTION ループを構想し、試行した。自らの社会人基礎力の診断・評価を実行した上で、強化目標の設定と行動宣言を行う。この一連の流れを電子ポートフォリオシステムとして構築した。学生が継続的に自己目標管理ができるように設計された仕組みであり、ここに導入されたメンタリングはマニフェストの具体性・実行性を高め、かつ、行動への動機づけを高める役割を持つ。半期の試行期間のなかで学生の基礎力診断値は上昇し、行動変容も観察された。自己目標を設定して実行を促す仕組みの有効性が示されるとともに、メンタリングの重要性が明らかになった。

キーワード

自己目標管理 メンタリング マニフェスト 社会人基礎力

1 はじめに

若年層のフリーター・未就職や早期離職が社会問題化するなかで、次代を担う若者の働く力を高めていくことが、急務の課題として浮上してきた。この状況を受けて経済産業省では、平成18年に社会人基礎力プロジェクトを発足させ、産業界の強力なサポートを得るとともに、学校教育においても社会人基礎力の強化をうながしている。

専門性と社会性の育成、自己啓発・自己研鑽・自己管理の徹底、知識社会に応える能力の醸成を教育目標に掲げる山口大学では、地域の基幹総合大学として、各学部・研究科の特性を活かしながら、個性あふれる専門性と社会性に富んだ人材、自己管理能力を身につけた人材、21世紀の知識社会における課題探求と問題解決の能力を持った人材の育成を目指して教育・研究活動を展開している。これら素養の根幹には社会人基礎力があり、この

力の育成スキームを確立することが重要な課題であるとの認識のもと、社会人基礎力を育成する教育に力をいれてきた。

本稿は、平成20年度に山口大学が取り組んだ、経済産業省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」の成果を報告するものである¹⁾。そこで開発した自己目標管理システムの試行から得られた知見をとりまとめた上で、教育効果を高めるための実践課題を議論したい。

2 自己目標管理システムの設計

2.1 システムの構想

大学生が卒業までに身につける能力には、専門分野の知識・技能のほか、幅広い教養をもち多様な文化・個性を理解する力、あるいは、語学や表現力、コンピュータを使う能力など様々な能力がある。これらすべてが重要なことは言うまでもなく、大学での授業や課

外活動を通じて身に付けていくべき力である。しかしながら、この根底にある基礎的な力の中でも社会で生きていくために必要な社会人基礎力については、これまでの大学教育においては具体的目標設定がなされることがなかったのではないだろうか。専門知識・技能であれば講義・演習の成績評価、英語力であればTOEICの点数など、客観的評価のなかで自らの目標を設定し、達成していく学生は数多い。これに対して社会人基礎力に関しては、客観評価が困難であると同時に、目標をたてる機会さえないのが一般的な大学生であろう。

山口大学では、教育目標のひとつに自己管理能力をあげ、キャリア教育は「自分のキャリアは自分で考え選びとる」力の育成を目標とする。このことを達成していくためにも、大学卒業までに身につけるべき基礎的な力について客観的評価の上で自己目標管理ができる仕組みが求められている。

このような状況のなかで、このたび経済産業省が提唱する社会人基礎力に焦点をあて、自ら目標をたて評価をし、さらに見直していく新たな仕組みを構築することになった。学生が自ら目標を設定し実行することを支援する社会人基礎力育成スキームとして構想されるもので、教員はメンタリングを通じて積極的にサポートし、一連の流れをWebシステムが支える仕組みを構築する²⁾。卒業後に社会で活躍することを念頭におき、卒業後の目標（当面の理想状態）への到達を目指して行われる学生の継続的な能力強化活動を支援する仕組みである。当然ながら学生たちは学業を中心とした大学生活をすごしている。大学のカリキュラムを通じて社会人基礎力を高めることができるような履修計画との連動を構想している。

2.2 システムの全体構成

システムは、目標をたてて行動し、評価に

基づき改善していくPDCAサイクルによる継続的な能力のスパイラルアップを考えている。具体的には、まず、学生の社会人基礎力の診断および自己評価を行い（CHECK）、社会人基礎力の強化目標の設定と行動宣言を行う（MANIFESTO）。そして、目標を達成すべく活動する（ACTION）ものである。これら一連の流れを蓄積し、気づきの材料とするデータを得るためのWebシステム「社会人基礎力電子ポートフォリオシステム」を開発し、学生の社会人基礎力強化を支援する仕組みづくりを目指すと同時に、開講する授業がどのような社会人基礎力に対応しているのかを示すカリキュラムマトリクスを作成して、履修計画の参考とする。教員はメンタリングプロセスを通じてアドバイスを行うとともに、マネジストの証人として温かく見守りながら、学生たちを継続的に支援する。

全体システムはこのように構成されるが、今回はカリキュラムマトリクスとの連動を除いた部分システムで試行した。

2.3 評価指標

学生個々人の社会人基礎力を自己評価するための指標として、株式会社リアセックが開発した尺度を用いる。この指標はリクルートワークス研究所が開発した「基礎力（Generic Skills）測定項目」に、社会人基礎力要素に対応させるため「遵法性・社会性」「創造力」の2項目を追加した24項目で構成される³⁾。各質問項目には5段階の選択肢が設定されるが、この間にさらにレベルを刻むことで経験によるレベル変化を詳細に把握できるようにしている。大学3～4年次で到達できる標準的なレベルが中位（9段階の5）となるように調整された指標である。

平成20年度後期の試行では、システム構築と並行しての診断・評価となったため、初期段階ではWebシステムは完成していなかった。したがって、24の質問を記載した用紙に

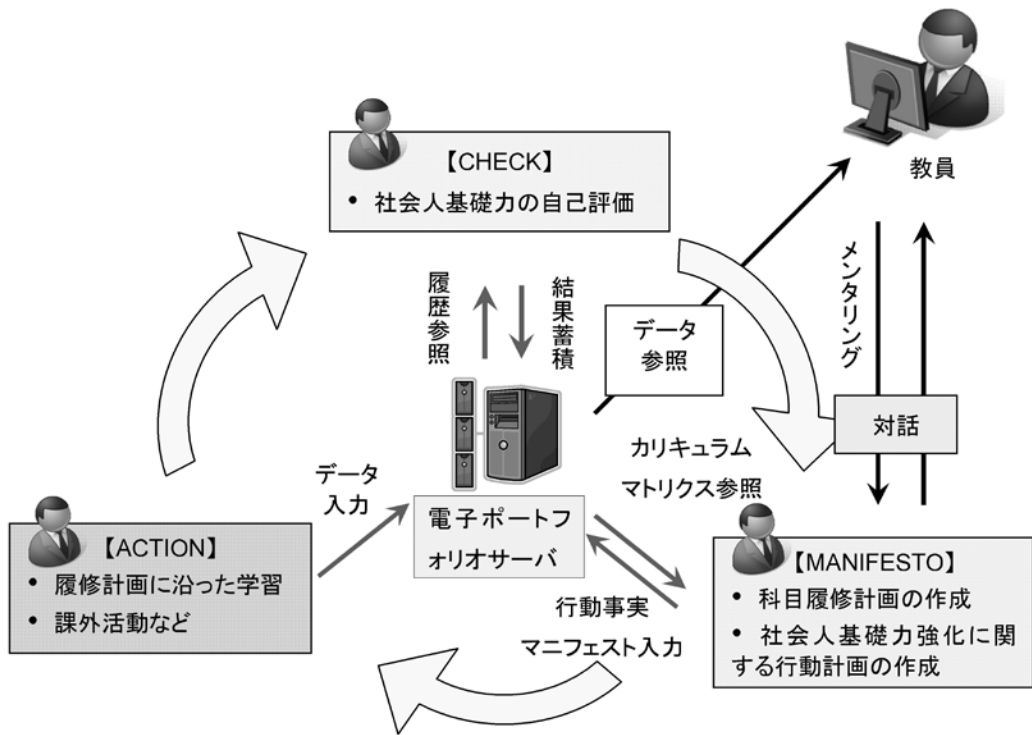


図1 社会人基礎力育成のための CHECK-MANIFESTO-ACTION ループ

回答した上で、各要素に対応した質問項目の平均点を自分で計算して社会人基礎力の12要素に換算した。よって、社会人基礎力の評価値は、最低が1.0で最高が9.0となる。質問項目の基礎力 (Generic Skills) と社会人基礎力の対応 (評価用紙) は表1のとおりである。

2.4 マニフェストと評価

マニフェストとは、自らの目標と達成のための行動計画を宣言するもので、学生には、自分の社会人基礎力診断結果を見ながらマニフェストシートを記載させた。大学卒業時 (社会人になる時点) に大きな目標をおき、半年間の目標設定を社会人基礎力の要素を用いて記載するよう指示した。強みをもっと強くする、弱いものを引き上げる、どちらでもかまわない。そして、自分を高めるための具体的な行動を記載して宣言したものをマニフェストとした。後述するメンタリングに

よって、全体を書き換えたものを今期のマニフェストとして保管しておき、半年後に自己評価を行う仕組みである。実際には、授業開始時にWebシステムは完成していなかったため、図2のシートを配布して記入させた。今回の試行では、授業の最初に実施した紙ベースの診断・マニフェストはシステムが完成した時点で管理者が入力しておいた。そして、最終的な診断ならびに評価はWebシステムに学生自身が入力した。

2.5 メンタリング

今回のシステムの特徴のひとつは、CHECKとACTIONの間にメンタリングをとりいれたところにある。自己管理は重要なことではあるが、これは自己完結を意味するものではない。他者評価をとりいれることで自分を見つめなおすきっかけともなる。また、視野を広げてものを考えることができる効果も期待される。メンターは人生の先輩としてのアドバ

イスを行うことで、経験に対する個人の意味づけを促進する役割を持ち、他者の視点を意識させることで、学生たちが自分で考える力を引き出す。そして、一緒にマニフェストを効果的かつ実行可能なものに修正していき、その後の行動を温かく見守る役割を持つ。

そこにはカウンセリングスキルが求められる。今回の試行では、キャリアカウンセラー1名と4名の教職員からなるメンターチームを結成した。実施に先立ちメンタリング研修を行い、「自分の経験や価値観を押し付けな

い」「相手に対して誠実である」「未来志向的な態度である」などメンターとしての姿勢を学び、スキルを高めてのぞんだ。

3 自己目標管理システムの試行

3.1 授業の概要

社会人基礎力の自己目標管理システムを、平成20年度後期の2つの共通教育科目に取り入れて実践した。両科目とも受講生のほとんどが3年生である。

総合教養「キャリア形成とコミュニケー

表1 社会人基礎力診断対応表

■ 質問項目		■ 社会人基礎力			
質問項目	得点	能力要素	内容	得点	分類
1) 独自性理解		主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。		前に踏み出す力(アクション)
2) 主体的行動					
3) 情報共有					
4) 相互支援		働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。		
5) 行動を起こす					
6) 完遂		実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。		
7) 情報収集		課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。		考え抜く力(シンキング)
8) 本質理解					
9) 目標設定		計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何かを検討し、それに向けた準備をする。		
10) シナリオ構築					
11) 創造力		創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える		
12) 話し合う		発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。		チームで働く力(チームワーク)
13) 意見を主張する					
14) 対人興味・共感・需要		傾聴力	相手の意見を丁寧に聞く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。		
15) 建設的・創造的な討論					
16) 親しみ易さ					
17) 気配り		柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。		
18) 多様性理解					
19) 修正・調整					
20) 役割理解・連携行動		状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。		
21) 違法性・社会性		規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。		
22) セルフアウェアネス		ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。		
23) ストレスコーピング					
24) 自己効力感・楽観的思考					

社会人基礎力の得点欄には、その項目に対応する左側の診断値の平均を記入する(小数点以下第1位まで)

私の社会人基礎力

マニフェスト

学生番号 _____ お名前 _____

学部・研究科 _____ 学科・課程・専攻 _____

私は大学卒業までに、

のような（のできる）人になりたいと思います。

だからこの半年間、とくに

社会人基礎力の能力
認定名を記入します。
複数あってもかまいません。

の力を高めていくことを、ここに宣言します。

具体的には、

という行動をすることで、自分の力を高めていきます。

署名 _____ 宣言日 _____ 年 _____ 月 _____ 日

図2 マニフェストシート



「キャリアと就職」授業風景



「キャリア形成とコミュニケーション」授業風景

ション」は、キャリアの理論とコミュニケーションの技法を学ぶ実践的科目で、本部キャンパス（山口市）にて開講される。もうひとつの「キャリアと就職」は、自分のキャリアは自分で考え選択するための基礎知識を習得することを目的とした講義科目で、工学部キャンパス（宇部市）の学生が受講した。

3.2 社会人基礎力インタビュー

両授業で上記スキームに基づきシステムを試行するなかで、社会人基礎力の理解を確かなものとし、実際のアクションのひとつとするために、課題レポート「社会人基礎力インタビュー」を課した。例えば、工学部では、技術者に求められる社会人基礎力を聞き出してこることとし、以下のような指示で社会人へのインタビューを実施させた。このACTIONには、大学が実施する「学内・業界企業研究会」⁴⁾への参加を盛り込み実効性を高めた。社会が求める人材像を理解させるとともに、その理想像に対する自らの立ち位置の把握を目指すものである。課題はあえて“あいまい”にしている。自ら課題を発見し、計画する力をつけることを企図するものであり、このことは授業中に口頭で説明した。

なお、本部キャンパスの授業では、技術者限定をはずした同様の課題を用いた。

3.3 教員等によるファシリテート

学期当初（10月）に基礎力診断を行って自らの状況を認識させるとともに、教員等によるメンタリングを受講生全員に実施した。具体的目標・実行可能な目標を宣言させること、教員がその証人となることで達成意欲の向上を目指す。このメンタリングプロセスを経ることで学生たちは目標を具体化していった。例えば、

「授業にまじめにとりくむ」

→「いつも見ているだけの学生実験を自ら手をあげてやる」

「アルバイトを頑張る」

→「アルバイト先の上司や同僚に自分から話しかける」

といった具合である。サークルの後輩との人間関係に悩む学生にはコーチングの本を紹介し、その本を読んで実践することにマニフェストを修正したこともあった。一つひとつはさほど困難な目標ではないにしても、文書にして宣言することで実行への意欲と責任感が増すことも事実であろう。メンターが具体的かつ視野を広げるアドバイスをすることが、効果的な目標設定へとつながっていった。

また、社会人基礎力インタビューの課題では何を聞いていいのかわからないという学生が続出したため、中間段階でインタビューの方法を書いた作戦シートを作成して対応した。実践の場となった学内業界・企業研究会



学内業界・企業研究会 12月6日（土）工学部食堂



学内業界・企業研究会12月23日（祝）食堂ポーノ

課題レポート 社会人基礎力インタビュー

1. 課題 : 技術者, 経営者, 人事担当者ほか, 技術人材について語ることができる人に「社会人基礎力インタビュー」を実施し, 記述せよ

2. 目的

技術者に求める能力は多様化していると言われている。実際に仕事においてどのような能力が求められているのかを理解することは、これからの就職活動において重要である。なぜなら、仕事で必要な能力を採用する学生に求めているからであり、この点は採用選考の評価ポイントとなっている。

技術系の学生にどのような能力を求めているのだろうか。この課題は、個別具体的な状況を企業の方にインタビューし、現実の企業の考え方を理解することを目的とする。当然ながらそこで得られるものは、ある企業の求める人物像であって他社にあてはまるものではないかもしれない。その点は理解したうえで自分自身の就職活動に活かしてほしいし、活かせるように聞き出してほしい。そのためにはインタビューの技法を習得することが必要であり、これは就職活動においても重要である。この課題は「質問力」を強化すること、「取材して書く」ことを通じた表現力アップも目的としている。

なお、技術者を目指さない人もいると思うが、自分が学ぶ世界が社会でどのように理解されているか、求められているかを知ることも重要である。技術者を知ることは、技術者にならない自分を理解し説明するためにも重要であることを認識して、課題に取り組んでほしい。

3. 内容

(省 略)

4. インタビューの相手

企業の技術者または人事担当者, あるいは経営者を基本とする。自分の志望する会社であってもなくてもかまわない。人選は評価の対象ではない。12月6日(土)からはじまる学内業界・企業研究会を活用することを原則とするが、工学部の各学科で開催する OBOG 懇談会等の場を活用してもよい。複数の人(会社)にインタビューして、自分なりに取りまとめること。

5. レポートの書式・提出

(省 略)

注) 必ず対面インタビューをすること。書籍・ホームページのみのレポートは不可

この授業で学んだ **社会人基礎力** を意識し、取材の方法を最大限活用して取り組もう



社会人基礎力インタビューを前にメンターとの作戦会議
12月13日(土) 学内業界・企業研究会会場横にて



大学生の基礎力を学ぶ書籍コーナー

の会場には、メンターとなる教員が常駐して現場での支援も行った。最初はわからないと言っていた学生も、担当教員との対話のなかで自らの課題を発見し、インタビューを計画していった。社会人へのインタビューはこの時期の学生にとってはややハードルが高いものではあったが、少しのかかわりで勇気をもって前に踏み出すことができることを再認識した。

授業のなかで担当教員は、なんどもマニフェストについて言及するとともに、日頃から社会人基礎力を意識して行動することを授業内で述べていたこと、そして、メンターによる温かい視線でのアドバイスは、実行しなければならぬという意識形成につながっていったと思われる。また、本部キャンパスの就職支援室に「大学生の基礎力を学ぶ書籍コーナー」を設け、書籍・映像資料からも学ぶ体制をとり、自ら主体的に社会人基礎力を高めることを積極的に促した。

学年末の時期（1月）に、もう一度診断を行い、当初のCHECKからの成長度の確認をするとともに、自身のMANIFESTO-ACTIONへの

評価を記載させた。一部の学生には再メンタリングを行い、この半年間の行動事実の振り返りを行いつつ、残る期間の学生生活で留意すべき事項を確認した。

4 システムの評価

4.1 社会人基礎力の変化

授業の最初（10月）と最後（1月）に実施した診断（CHECK）について、学生の平均得点をまとめたものが以下の表である。得点は1～9の間にあり、平均点はほぼ5前後に分布している。事前事後の比較をすると両授業とも、すべての社会人基礎力要素で平均得点は上昇している。とりわけ工学部の学生が受講する「キャリアと就職」では、課題発見力・計画力・発信力・傾聴力・状況把握力・柔軟性の各要素が1ポイントを上回る上昇を示し、社会人基礎力インタビューにチャレンジしたことの効果があらわれたものと考えられる。

また、各要素においておおむね半数以上の学生の得点がそれぞれアップしている。「キャリアと就職」の受講生では、89.7%の

表2 社会人基礎力診断の前後比較

	キャリアと就職						キャリア形成とコミュニケーション					
	平均得点			前後比較 (%)			平均得点			前後比較 (%)		
	事前	事後	差	上昇	横ばい	低下	事前	事後	差	上昇	横ばい	低下
主体性	5.0	5.5	0.58	64.1	12.8	23.1	4.9	6.0	1.09	81.5	3.7	14.8
働きかけ力	4.9	5.6	0.63	64.1	7.7	28.2	5.4	5.7	0.30	48.1	22.2	29.6
実行力	4.8	5.6	0.74	69.2	7.7	23.1	5.7	6.4	0.70	70.4	7.4	22.2
課題発見力	4.5	5.6	1.10	79.5	17.9	2.6	4.6	5.5	0.98	81.5	11.1	7.4
計画力	4.5	5.5	1.01	76.9	15.4	7.7	4.9	5.8	0.87	66.7	22.2	11.1
創造力	4.1	4.6	0.56	41.0	38.5	20.5	3.8	4.4	0.56	51.9	25.9	22.2
発信力	4.1	5.3	1.18	74.4	17.9	7.7	4.5	5.6	1.06	74.1	14.8	11.1
傾聴力	4.5	5.7	1.23	89.7	2.6	7.7	5.2	6.1	0.87	70.4	22.2	7.4
柔軟性	4.9	5.9	1.05	69.2	15.4	15.4	5.3	6.0	0.76	77.8	11.1	11.1
状況把握力	4.7	6.0	1.31	69.2	15.4	15.4	5.1	6.3	1.19	74.1	11.1	14.8
規律性	4.8	5.5	0.72	46.2	41.0	12.8	5.3	5.9	0.63	48.1	33.3	18.5
ストレスコントロール	4.6	5.2	0.69	64.1	7.7	28.2	5.2	5.6	0.46	63.0	14.8	22.2

注) 事前・事後比較可能な者の平均値 サンプル数「キャリアと就職」39 「キャリア形成とコミュニケーション」27
前後比較は事前得点と事後得点を比較して上昇・横ばい・低下した者それぞれの割合 (%)

学生の傾聴力が、74.4%の学生の発信力がアップした。授業で知識としてのコミュニケーションの重要性を学び、かつ、実際に行動したことの効果があらわれている。また、「キャリア形成とコミュニケーション」の受講生は、81.5%の学生の主体性が、また、同じく81.5%の学生の課題発見力が上昇した。主体的に人とかかわることの重要性を授業のなかで学んだこと、課題レポートに自らの課題をもって取り組むことを重視し、担当教員が授業中に再三発言してきたことを受けとめて真剣に取り組んだ結果と思われる。

全体的に得点は上昇しているものの、創造力・働きかけ力・規律性・ストレスコントロール力の上昇度合いは低く、とくに創造力に関しては、得点自体も低い傾向にある。受講生は学部3年生が中心であって、大学の授業では自ら創造力を発揮する場面があまりないのかもしれない。授業改善への課題と言える。

学生Aに関するメンタリング報告（2月）

進級できなかったことより自己効力感が低くなっていた。世の中のせいにするなど、防衛機能が働いていた。メンタリング手法において、敬意・尊重の姿勢を示すことを意識して関わることを主とする心理的支援により、今まで否定的に捉えていたことを肯定的に受け入れられるようになったという効果が見られる。

マニフェストの目標を実行するためにも、研究室に入れるように、まずは、進級したいという意欲が湧いてきた様子。実家が会社経営をしているという環境に対し、自分の役割を認識し、そのための行動を起こす気持ちに変化している。具体的には、今の大学での勉強は将来何に役立てることができるかを考え、会社経営において困らないように勉強しておく必要があると認識できるまでに変化した。

本人としては、マニフェストがあることで、自分の軸は何なのか、考えるようになった。行動できない原因もわかった。これからは、諦めず、自己管理をしていきたい。まずは、時間管理と取得単位の管理をしていきたいと考えている。前回に比べ、社会に順応していく力が大きく身に付いた印象である。

学生Bに関するメンタリング報告（2月）

以前に比べ、表情・声が明るくなり、しっかり自分の考えを述べられるようになった。CHECK-MANIFESTO-ACTIONループにのって行動したことにより自信が付き、次の目標に繋がっている。メンタリング手法が、挑戦の機会の場の提供になったようである、人に働きかけることを目標としたことで、人との関わりの楽しさを発見し、企業インタビューも前向きに取り組んだ様子。個人的達成により自己効力感が高まり、興味に繋がりが、次の目標を自ら見つけることができるようになった。このサイクルは今後にも繋がっていくと思われた。授業においても、学んだことを自分の中に取り込み行動に繋がったことで自信がついた。

具体的には、まずは行動することの大切さを学んだことで、積極性が身に付き、実行して得た体験から、まずは動くという習慣に繋がっている。人と関わることを通して、自己理解を深めたいという目標を設定。この設定においても、以前との違いは、能動的な関わりになったこと。成長による力強さを感じるようになった。

一部の学生には、授業終了後に個別に事後聞き取りを行った。メンタリング担当者が把握した授業前後の学生の定性的な変化の例を以下に示す。ここからわかることは、共感的に関わることで学生たちの視野が広がること、メンターとの関わりが「やらなければならない」という意識を形成し、行動につながっているということである。

4.2 測定結果の要因分析

今回の授業を通じた社会人基礎力の向上には、以下の要因があると考えられる。

① メンターとの出会い

両授業の受講生にメンタリングを実施し、原則として一人ずつ約1時間面談を行った（一部にグループで実施したこともある）。所属する学科の教員ではなく、事前研修で受容的態度をとることを確認したキャリアカウンセラーおよび教職員メンターたちを前に学

生は、多くを語り、その場でマニフェストを書き換えていった。前述の定性的変化にあらわれているように、学生の中にはメンターと話をしたことを重要視する者もあり、「やらなければならない」との意識を持ち続ける効果をもたらしたものと考えられる。当初、メンタリングを拒否する、あるいは、嫌がる学生がでてくるのではないかと懸念したが、まったくの杞憂に終わった。学生たちはメンターとの会話を楽しみ、口数多く語っていたのが印象的だった。

② アクション可能なマニフェスト

マニフェストで宣言をすることは、具体的な行動に結びつく推進力となった。この点は大きな効果であり、システムの有効性を示す証左である。学生が当初記載した状態はほとんどが抽象的・精神論的なもので、行動をとまなわなくても達成できるようなものが多かった。一人ひとりの学生の書いたものをメンタリングによってなんらかの行動をとまなう具体的なもの、かつ、半年間で実行可能なものにしていく作業は、メンターにとって時間のかかる作業であったが、最終評価の時点で9割ほどの学生がなんらかのアクションを起していた。宣言すること、記録に残すことの効果は大きかったものと考えられる。

③ 実行可能なレポート課題

両授業の課題を社会人へのインタビューとして、キャンパス内で実施する学内業界・企業研究会への参加によって実行できるものとした。学内で課題ができることでアクションのハードルは低くはなったものの、インタビューの内容は自ら構成していかなければならず、方法論的には難しいと感じた学生もいたようである。400社ほどの研究会のうちどの研究会に参加するか、いつ参加するかは自主性にまかせてた。何度も参加して複数の方にインタビューする学生もいれば、なかなか

一歩が踏み出せない学生もいた。また、企業ブースは訪問するものの質問ができない学生もいたが、何度かチャレンジするなかで乗り越えていった。学内の場の活用で実行機会を増やした効果は大きかったと考える。

④ 理解・実践・定着の重視

授業では知識を教授する場面が多く、常に社会人基礎力の話をしているわけではないが、担当教員は授業のなかで何回も社会人基礎力という言葉を出してメッセージを送り続けた。マニフェストで宣言したことの実践はもちろんではあるが、頭で「理解」することもまた重要である。授業のなかでコミュニケーションの理論などを語るとともに、「大学生の基礎力を学ぶ書籍コーナー」に取り揃えた本で学習することを推奨した。頭でわかったことを実践し、何度も繰り返して定着させることで、社会人基礎力は向上する。このことを受けとめ学生たちは実行してくれた。得点が全体的に上昇しているのは、このような取り組みの反映であると分析している。

5 まとめと今後の課題

CHECK-MANIFESTO-ACTION にメンタリングを組み合わせた社会人基礎力を高める自己目標管理の手法は、今回の試行によってその有効性が確認されると同時に、いくつかの課題も明らかになった。最後にここで得られた課題を指摘することで、本稿のまとめとした。

ひとつは、ループを回すことの課題である。このシステムによって、学生が入学から卒業まで継続的に社会人基礎力を育成する仕組みが整備される。ただし今回の取り組みは実施期間が約半年間であったため、この期間の取り組みでは提案したスキームの「ループ」を回すことはできず、CHECK-MANIFESTO-ACTION の各プロセスをひととお

り実施してACTIONの結果を確認するのが限界であった。しかし、「ループ」という名称が示すとおり、このスキームは定期的に繰り返して初めて設計時に期待した効果を発揮する。また、社会人基礎力の育成には継続性と習慣化が重要であると考えられるが、その意味でも各人の現状を見誤ることなく定期的に確認し、状況に即したマニフェストを定期的に作成しながら段階的に能力強化を図る意識付けを行うこと、そして、慌てて事をなそうとせずある一定の期間をかけてアクションに取り組ませることが望ましいと考える。その意味で学生の成長は段階的なものになるが、学生個人の実情から乖離した理想像だけを謳ってもマニフェストとしての意味をなさない。実効可能なマニフェストを定期的に掛け替えながら、「少し前に踏み出すことでのぼることのできる低い梯子をのぼる行為を積み重ねて成長を誘う」方法を取りながら、学生が無理なく自立的に成長していけるようにすることが肝要である。

また、CHECK-MANIFESTO-ACTION ループの試行によって期待どおり学生の自立的な社会人基礎力向上の効果が確認できたが、自分でループを回せるようになるまではメンターが機会をとらえてメンタリングを実施し、学生に自省を促すとともに自己理解を促進させる働きかけが必要不可欠であることも同時に明らかになった。学生がマニフェストに記載した内容を実際に行動に移せるかどうかは、メンタリングでどれだけメンティの本心を引き出すことができるかに依存する。個々の学生が抱えている問題やつまづきに対して、それを自力解決するための視野の広がりを与えるためには、個々人それぞれに異なる手段を用いることが必要となり、多数の教員がこのスキームを活用した学生の能力育成支援を行おうとする際にはメンタリングスキルの伝達が成否の重要なカギを握る。教職員の力の向上もまた、求められているのである。

(大学教育機構 学生支援センター教授)
(産学公連携・イノベーション推進機構
准教授)

(Career Blossom 代表
キャリアカウンセラー)

【謝辞】

本稿は、経済産業省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」の成果に基づくものである。プロジェクトの機会をいただいた経済産業省ならびに数多くの示唆をいただいた同省の皆様へ感謝申し上げます。また、本プロジェクトの遂行にあたり、株式会社リアセック・松村直樹氏に協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- 辰巳哲子「すべての働く人に必要な能力に関する考察－学校と企業とが共用する「基礎力」の提唱」, Works review (リクルートワークス研究所) 1, 2006, p124-133
- 藤井文武・平尾元彦「社会人基礎力を高める授業の実践－産学連携PBL授業「アクティブラーニング」の取組－」, 『大学教育』第7号, 2010, p23-34

【注】

- 1) 山口大学では、「学部1年で着手しCHECK-MANIFESTO-ACTION ループで定着させる継続的な社会人基礎力の育成と評価」に取り組んだ。このプロジェクトは、産学連携PBL授業の実践と自己目標管理システムの構築からなるものであり、本稿ではもっぱら後者の成果に基づき論ずる。前者は、藤井・平尾(2010)を参照されたい。
- 2) メンタリング(mentoring)とは、知識や経験の豊かな人(メンター)が、現時点で

まだ未熟な人（メンティ）に対して行う，成果をあげるための支援行動である。メンターは，カウンセリングなどのスキルを用いて，メンティのキャリア発達と人間的成長を促す。

3) リクルートワークス研究所のGeneric Skillsは，辰巳（2006）参照

4) 企業や官公庁で働く方々を山口大学の吉田・常盤両キャンパスに招いて開催する研究会。平成20年度は11月～2月までの開催期間中417社の参加により研究会を開催した。ブース方式の研究会の会場は工学部食堂（工学部キャンパス），食堂ポーノ（本部キャンパス）である。研究会の趣旨は次のとおりである。

学内業界・企業研究会とは，山口大学の学生が，業界動向や会社・仕事をより深く，よりリアルに理解できるよう，経営者・人事担当者，また，本学の卒業生など会社等でご活躍の皆様をキャンパスにお招きして開催する研究会です。本学ではこの学内業界・企業研究会をキャリア教育の一環と位置づけており，学生たちはこの機会を活用して，幅広く業界・企業を研究し，就職活動ならびに自身のキャリア形成に役立てることを期待しています。

山口大学学生支援センター・就職支援部